ペルーの教育改革

―二言語教育とインターカルチュラル教育―

青　木　芳　夫*

Reforma educativa del Perú: educación bilingüe y educación intercultural

Yoshio Aoki

要　旨

プーノ地方の農村部で始まったペルーの二言語教育は二言語・インターカルチュラル教育へと発展した。その経験は、やがて児童・生徒の大半がスペイン語を日常的に話すようになっている都市部でもインターカルチュラル教育の基礎を形成してきた。そして今日では、例えばクスコ地方では、「第二言語としてのケチュア語」教育、つまり相互型の二言語教育が、不十分ながらも、生まれようとしている。

Ⅰ　はじめに

インターカルチュラル（異文化間性、あるいは異文化理解）ということばを耳にするとき、ボリビアのコチャバンバ地方（ケチュア語圏）で活動するＣＥＮＤＡというＮＧＯの1997年カレンダーの標語が今でも記憶にのこっている。「ポンチョをかぶったりウスタ〔アンデス風サンダル〕を履いたりすることがインターカルチュラルということではない」。インターカルチュラルとは、互いの文化を尊重し合う心だ、と、前半部分はケチュア語で、そして後半部分はスペイン語で、それは訴えかけていた（次ページの図１参照）。

それから10年余り経った今日、インターカルチュラル教育が、ペルーの教育改革の基本理念のひとつとなっている。筆者はこれまで先住民言語を母語とするモノリンガルの児童を中心に実施されてきたペルーやボリビアの二言語教育を考察してきたが[1)]、本稿では、これまでの拙稿の内容を振り返るとともに、ペルーの全国的な公用語であるスペイン語によって行われてきた教育の歴史と変化に注目してみた。

具体的には、言語分野の教科書つまりスペイン語教科書の分析をとおして、とくに、主人公の設定の仕方、ペルーの多様性の描き方、そして到達すべき教育目標などの分析をとおして考察した結果、ペルーのインターカルチュラル教育が1980年代以降の二言語教育の中から発展してきたこと、そして現在では二言語教育においてだけでなく、かつては同化主義的な傾向が濃厚だった

平成19年９月20日受理　*文学部史学科教授

図1　CENDAの1997年カレンダー上半分

判読困難ではあるが、最下段に「インターカルチュラル」についてのケチュア語の説明があり、学習風景を中心に農村の子どもたちの祝祭や食事、農業の様子がえがかれている。
（出典）CENDA（Centro de Comunicación y Desarrollo Andino）, 1997

公用語のスペイン語による教育においても多文化主義的なインターカルチュラル教育が導入されてきていることを、明らかにすることができた。

II　ペルーの二言語教育 ―セルバ・プロジェクトとプーノ・プロジェクト―

1　セルバ・プロジェクト―移行型の二言語教育―

二言語教育とは、公用語だけではなく先住民言語や少数民族言語などを併用して読み書き能力の向上をはかろうとする教育方法のことである。スペイン語が公用語であるペルーの場合、先住民言語の活用は地方レベルでは20世紀初頭から試みられてきたが、中央政府の認可を得て開始されるのは、第２次世界大戦後のことである。ペルーは中央を南北に走るアンデス山脈を軸として海岸部（コスタ）と山岳部（シエラ）と森林部（セルバ）の３つの地域から構成されているが、まずアマゾン流域に代表されるセルバにおいて、キリスト教（プロテスタント）系の団体で、聖書の普及を主目的に掲げる夏期言語研究所が二言語教育の推進母体となった。彼らはウカヤリ県のプカルパという町の郊外にあるヤリナコーチャに本拠を置き、布教活動だけでなく先住民教育やコミュニティ開発など、水上飛行機などを利用してさまざまな活動を、セルバの先住民族のあいだで展開していき、1977年には24民族集団、210コムニダー、約１万2000人の生徒を対象にして二言語教育を展開するまでになっていた[2)]。

しかし、夏期言語研究所の創立者であるタウンゼント（W・C・Townsend）は、1950年に二言語教育について「いままで孤立をもたらしてきた〔先住民〕言語が、自分たちの消滅を早める道具に変わるだろう」と語った、とされるように、夏期言語研究所の関心は先住民言語の維持・発展よりも、スペイン語化にあった。

セルバ・プロジェクトにおける公用語であるスペイン語と母語である先住民言語との役割分担を見ると、先住民言語は最初の４年間だけで、５年次からの２年間は全面的にスペイン語で授業が行われるようになる。このように、先住民言語の活用といっても、スペイン語化のための、つまり公用語習得までの一時的な手段として、いわば「通過言語」として、活用されるだけであった。その結果、授業用語や専門用語を見ても、その多くはスペイン語からの借用語がそのまま流用されていた。

このような傾向は、言語だけにとどまらず、算数や社会などの教科書についても認められる。1973年の二言語教育令は二言語教育を正式に規定したペルーで最初の法令であるが、第５条において、二言語教育校のための「先住民言語の文化的特質を考慮した特別カリキュラム」の作成を命じた。1960年代までは二言語教育の目的が先住民族の「文明化」つまり「近代化」にあることを自明のこととしてきたセルバ・プロジェクトであったが、対応を迫られた結果、たとえば1975年にはジャックウェイ（M・A・Jackway）が「文化に適応した教育」という論稿を執筆することとなる。これによれば、セルバ・プロジェクトは、先住民文化の「形式」的・「舞台背景」的利用を試みているにすぎない。より具体的には、①現地産の資材による校舎の建築、②授業時間の工夫、③先住民言語の教授語としての使用、④生徒と同じ文化に属する教師による教育、⑤特別のカリキュラムなどである。

教科書の主人公の設定を見れば、社会科のように地元の児童を主人公としている科目もあるが、興味深いのは、第二言語としてのスペイン語の教科書では地元の児童よりもむしろコスタの都市からセルバへやってきた来訪者が事実上の中心になっていることである。たとえば、２年生用のスペイン語教科書の『いたずらっ子のペペ』では、中央からやってきた学校視察官がペペという先住民児童のいたずら癖を矯正する。また１年生用のスペイン語教科書では、風邪が流行していたセルバの村にボートのモーターの修理のために偶然通りかかった都会出身の親子連れ（スペイン語モノリンガル）が地元の児童（先住民言語モノリンガル）に紹介された地元出身の二言語教育校の先生（バイリンガル）から医療センターで風邪薬を購入するように頼まれ、コメの売上代金を預かって村から出発する。ここでは、先住民言語よりもスペイン語の方が、また地元の伝統的な薬草よりも近代医薬の方が、さらには家族や共同体よりも国家の方が、優秀であり優先されるということが暗示されている。このように、セルバ・プロジェクトは移行型の二言語教育であり、典型的な同化主義的・近代化教育であった。

２　プーノ・プロジェクト－維持型の二言語・二文化教育－

ペルー・ボリビア国境のティティカカ湖に面したプーノ県で展開されることとなるプーノ・プロジェクトは、正式にはプーノ二言語教育実験という。1975年に締結されたペルー・西ドイツ間の政府間協定にもとづく国際技術協力事業としてはじまり、ドイツ技術協力会社が①教科書の作

成、②二言語教師の養成、③教育モデルの評価、の３点で支援した。1977年から３年間の準備期間を経て、1980年度からは母語率75％以上のケチュア語圏とアイマラ語圏の計100校で二言語教育実験が開始された。

ところで、先住民言語が注目されるようになるのは、1968年のクーデタにより成立したベラスコ左派軍事政権の時代（～1975年）のことである。この時代は「ペルー革命」の時代とも呼ばれるように、ベラスコ政権は、上からの近代化や国民統合に積極的に取り組んだ。それまでコスタと比較して社会経済的な発展や政治的な参加から取り残されてきたシエラやセルバから先住民系の農民大衆が海岸部の諸都市に大挙して流入するようになり（「民衆の氾濫」として知られる）、集団的な土地占拠を組織したり雑多なインフォーマルな経済活動に従事したりするようになると、もはや彼らを無視し続けることは不可能になっていった。国民統合のためには、ペルー独立運動の先駆として先住民系のコンドルカンキつまりトゥパック・アマル２世を再評価してペルーの新たな国民統合の象徴としたり、1975年には、インカ時代の公用語だったケチュア語をスペイン語と対等な公用語に指定したりした。しかし、1970年代当時はまだケチュア語の公用語化は象徴的な意味合いしか持ち得なかったし、軍事政権から民政移管される前年の1979年に発布されたペルー憲法では、ケチュア語はスペイン語と対等な、つまり全国的な公用語ではなくなり、アイマラ語と並ぶ地域的な公用語に指定されたにすぎなかった。ちなみに、このときの憲法では、アマゾン諸語がはじめて「文化資産」に指定された。なお、第35条において、「国家は先住民言語の調査研究を奨励する。国家はまた、ケチュア、アイマラ、そのほかの共同体が彼ら自身の言語によって初等教育を受ける権利を保障する」と規定し、先述の1973年の二言語教育令の方針が再確認されている。

やがて教育実践の中で、プーノ・プロジェクトは、二言語教育令や1979年憲法の枠を越え、単なる二言語教育から事実上の二言語・二文化教育へと変貌を遂げていくこととなる。

プーノ・プロジェクトにおけるスペイン語と先住民言語との役割分担を見ると、 第一に、二言語教育令では先住民言語の使用は最初の４年間だけであったが、プーノ・プロジェクトの場合、初等教育の全６年間をとおして活用される。また、読み書き能力だけでなく、文法をも含む言語能力一般を、まず先住民言語で教育する。ペルー教育省の初等教育用指導要領では、文法は「スペイン語で」教育すべきだとされていたが、これを「母語で」と読みかえ、ケチュア語を母語とする児童には、公用語であるスペイン語の文法ではなく、まずケチュア語の文法から教えるべきだとしたのである。そして最終学年つまり６年生の時には、両言語の相違に気づかせるような仕方でスペイン語と母語の両方の文法を教えることとなる。このように、プーノ・プロジェクトでは、先住民言語は、スペイン語習得までの単なる「通過言語」としてではなく、授業言語としてスペイン語と同等の役割を与えられるようになり、スペイン語化したあとも児童が完全に自己表現することができるような「持続言語」となることがケチュア語をはじめとする先住民言語に期待されたのである。

プーノ・プロジェクトは自らの方式を「二言語と二文化を使った教育」つまり二言語・二文化教育であると規定し、「地域文化と国民文化の内容を統合したカリキュラムによって児童の総合的発展」を目指した。つまり、言語にとどまらず、先住民族の伝統的な文化や自然認識が再評価

され、西欧流の自然科学とともに「アンデス科学」として教育にも活用されるようになった。具体的には、①人間と自然との間の均衡のとれた相互関係、②チューニョつまり凍結乾燥ジャガイモに象徴されるような自然資源の保存と合理的利用、③先住民社会を特徴づけている人間と自然との関係の確認と西欧社会のそれとの比較、つまりエコロジーとエコノミー、④知識・慣習・技術などの土着伝統の再評価などが、児童に伝達されるべき価値とされた。

プーノ・プロジェクトのばあい、先住民児童の置かれている現実から出発するようにカリキュラムは構成されている。学年が上がるに連れて、児童の世界もまた、家族や友達から、村や、地域、そしてペルー全体へと拡大していく。次ページの図２は、ペルーをセルバ・シエラ・コスタの３地域に区分し、さらに各地域における言語分布を示している。ここで興味深いことは、セルバやシエラでもスペイン語が話されていたり、一方コスタではケチュア語やアイマラ語、さらにアマゾン諸語の一つであるシピーボ語が話されていたり、あるいはケチュア語といっても「クスコ語」や「プーノ語」、「アレキーパ語」などの違いがあったりすることが示されているところであろう。このような言語分布の変化は、第二次世界大戦後の周辺農村から首都リマをはじめとする都市への人口移動によってもたらされた現象ではあるが、各地域が孤立しているのではなく、相互に関連しあっていることが示唆されており、興味深い。

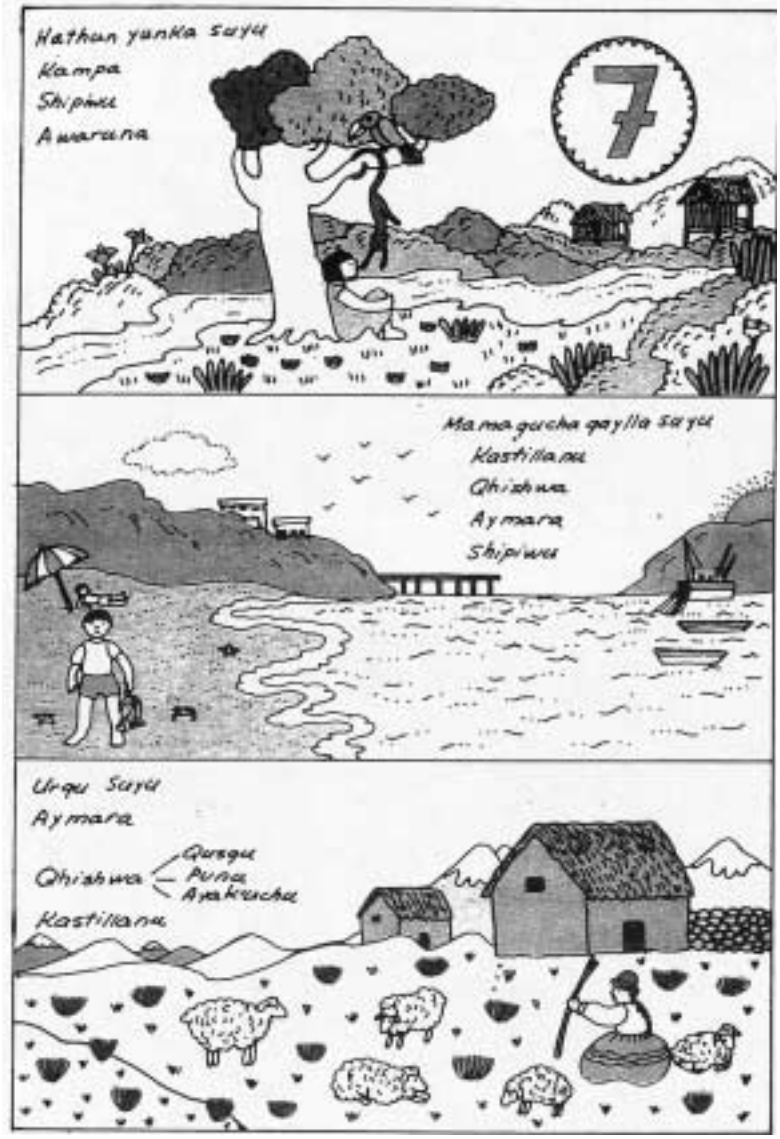
プーノ・プロジェクトによってもたらされた二言語・二文化教育（なお、プーノ・プロジェクト自身も終わり頃には自らの方式を二言語・インターカルチュラル教育と呼ぶようになっていた）の成果は、1990年代以降、主としてボリビアで継承され、発展していくこととなる[3)]。じつは1980年代後半には世界銀行からの支援を得てプーノ・プロジェクト方式の教科書がクスコ地方でも使用されるようになる手筈だったが、累積債務危機をめぐって当時のアプラ党のガルシア政権（現在のガルシア政権に対して、第１期ガルシア政権）と国際金融機関との関係が悪化したことにより、クスコ地方への普及は実現しないまま、国際技術協力事業としてのプーノ・プロジェクトは終わりを迎える。ペルーにおいて再び二言語・インターカルチュラル教育が注目を浴びるには1990年代後半まで待たねばならなかったといってよい。

III　インターカルチュラル教育に向けて

ペルーの二言語教育の現状について、長年にわたり自ら二言語教育に携わってきたスニガ（Madeleine Zúniga）は辛らつに批判したことがある。先住民言語を母語とする児童のスペイン語力を①ほとんどできない、②まあまあできる、③先住民言語と同じようによくできる、のように大別すると、①の児童には先住民言語だけで、そして②の児童にはスペイン語がもう分かるものとしてスペイン語だけで教育されており、二言語・インターカルチュラル教育は掛け声倒れに終わっており、真の意味での二言語教育は存在しないし、したがって先住民言語の習得もスペイン語の習得もともに中途半端に終わっている、と批判したのである[4)]。

ところで、ペルー南部の山岳部に位置するクスコ地方にはクスコ市街とマチュピチュ歴史保護区という二つの世界遺産があり、これら二つの世界遺産のあいだには「聖なる谷」と呼ばれる肥沃なトウモロコシ栽培地帯が広がっている。その中間に位置するウルバンバ郡ユカイ地区（写真

図２　ペルーの諸言語の分布（プーノ・プロジェクト）



（出典）*Qhawana: Libro de lenguaje en quechua puneño para el cuarto grado de educación primaria bilingüe,* Lima-Puno, 1984, p.71
上段：大熱帯地方（カンパ語、シピーボ語、アワルナ語）
中段：海岸地方（スペイン語、ケチュア語、アイマラ語、シピーボ語）
下段：山岳地方（アイマラ語、ケチュア語、クスコ方言、プーノ方言、アヤクーチョ方言、スペイン語）

参照）は人口約3000人の田園地帯であり、スペイン語とケチュア語の典型的な二言語併用地域である。母語別で見れば、1990年代当時ちょうどスペイン語とケチュア語が半々くらいになり（旧世代と比較すると、新世代ではスペイン語を母語とする人々のほうがかなり多くなっている）、二つの言語が日常的に併用されてきた。しかしながら、ウルバンバ川と平行に走るバス道路沿いに細長く民家が密集しているため、ペルーの統計によれば、その大半が、「農村部」ではなく「都市部」に分類される。したがって、同地区の「農村部」は地区の中心から峠を越えて徒歩40分くらいのところにある付属村のサンフアンという名の農民コムニダーのみである。

サンフアンの人口は300人ほど（つまり、ユカイ地区の人口の約１割）で、その大半はケチュア語が母語である。この農民コムニダーには４年次までの小学校があり（したがって、５年次からは、スペイン語で教育が行われているユカイやウルバンバの小学校に転校しなければならない）、そこでは2000年前後から二言語教育が始まった。つまり、それまでは授業中に自然発生的にケチュア語が使用されることがあったにせよ、公式にはスペイン語でのみ教育が行われていたのである。最初のうちは先住民言語で書かれた教科書しか配布されなかったこともあり、子弟のスペイン語習得を望むコムニダーの保護者住民からはやや唐突な感をもって迎えられた。父兄の要望もあり、スペイン語は古い教科書を使って教えられた。教員は二言語併用者であったが、資格は三級で、二言語教育の正式な訓練も受けたこともなかった。おそらく、教育現場は混乱したことであろう。

だから、ユカイ地区の大半では、昔も今も、スペイン語のみで学校教育が行なわれてきたことになる。ユカイの「都市部」は、スニガの分類によれば②まあまあできる、と③できる、の中間くらいに相当する地域である。このような地域でプーノ・プロジェクトに見られるような体系的

写真　ユカイ地方中心部の全景

バス道に沿ってのどかな田園風景が展開しているが、ペルーの国勢調査の区分によれば「都市部」に分類される。

な二言語・インターカルチュラル教育が早くから実施されていたならば、ペルーの二言語教育の現状ももっと違った展開を見せていたかもしれない。また、今日、ユカイの隣町であり郡都でもあるウルバンバ町にある高等師範学校が、プーノ県のアルティプラーノ大学などとともに、二言語教育の教員養成やケチュア語による副読本の作成を担当するようになっているのを見ると、その感は強くなる。しかし、ペルーの場合、農村教育といえば、コムニダー教育つまり僻地教育を指してきた[5)]。

次節では、このユカイにおける1980年代から現在に至る小学校教育の変化を、つまり同化型教育からインターカルチュラル教育への転換を、言語教科書（今日における正式の科目名は「総合コミュニケーション」という）の分析を通して跡付けていきたい。

1　1980年代の同化型教育

このユカイで育ったＡさんの記憶によれば、1960年代前半には小学校ではまだ教科書は使用されていず、個々の先生の判断に委ねられていたようである。Aさんの場合、先生が百科辞書のようなものを口述するのをノートに筆記していたという。

したがって、教科書が使用されるようになるのは60年代の中頃からのようであり、しかもまだ有償だった。教科書の無償配布が実現するのは比較的最近のことなのである。当時、この地方でよく使用されていた言語教科書つまりスペイン語教科書に、スペイン語の個人名をタイトルにしたシリーズがある[6)]。たとえば、３年生用は*Panchito*（図３参照）、４年生用は*Juan Carlos*、６年生用は*Marco Antonio*、といった具合である。以下で分析する３年生用教科書の*Panchito*の書誌を記しておく。Alfredo Díaz Córdova & Rosa E. Díaz Guillén, *Panchito: Libro de lectura para el tercer grado de educación primaria*, 6ª ed., Lima, Editorial Escuela Nueva S.A. この教科書は、INIDE当局の1984年の規準第3079号に準拠していることが明記されている。

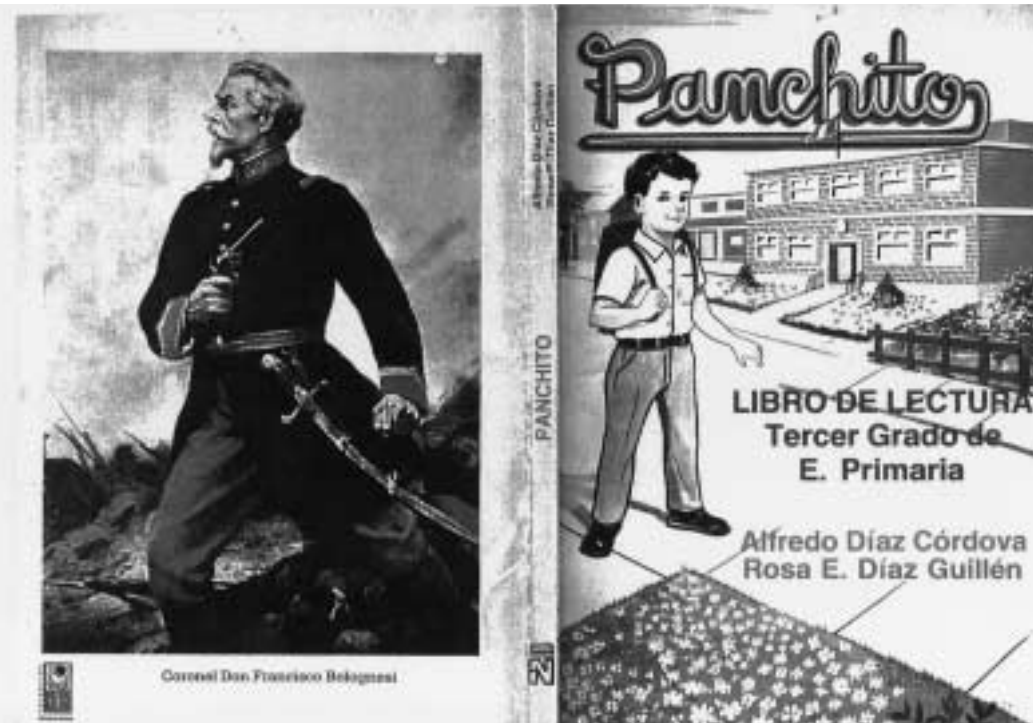
ａ）主人公（パンチート）の設定：

教科書は、次のような場面から始まる。

「これがパンチートです。彼は快活で、とてもよい少年です。パンチートは別荘でお父さんやお母さんや妹のヨリータと一緒に暮らしています。８歳です。３年生です。お母さんもお父さんも彼を愛しています。パンチートはボール遊び〔サッカー〕をしたり、レアルという名前の犬と遊んだりします。」（６ページ）

当時のペルーの場合、学年末の休暇は長く、１月から３月にかけての約３か月に及んだという。現在は２か月に短縮されている。３年生用の言語教科書は、田舎の別荘で休暇を過ごした主人公のパンチートが、ちょうどお腹をすかせた小鳥が巣に戻ってくるように、知識に飢えて学校へ戻ってくるところから始まる。イラストから判断すると、主人公のパンチョは、コスタの大都市でペルーの首都でもあるリマの比較的裕福な白人系の家庭（父母と妹の４人家族）で暮らしている。従兄弟のホルヘと一緒にチョリーヨス海岸に日帰りで遊びに出かけたり、お父さんと高山鉄道に乗ってアンデス中部の都市ワンカーヨに泊りがけで旅行したりしており、パンチョを中心にして物語が展開していく。つまり、ユカイのようなクスコ地方の田園地帯で学んでいる児童もまた、パンチョのような首都のリマっ子の体験を追体験することになるのである。

図３　*Panchito*　表・裏両表紙



表表紙（右）の背景に映っているのが小学校の校舎であろう。
裏表紙（左）の人物がフランシスコ〔パンチョ〕ボログネシ大佐。

b）礼儀正しさ

教科書を通読して目を引くのは、西欧流のマナーと礼儀正しさを説いたページ群である。煩瑣になるのを厭わずに紹介する。

第一に、学校では行儀よくしなければならなかった。つまり、教室に入るときには先生に尊敬の念をこめて挨拶をし、勉強机はつねに整頓し、姿勢を正してよそ見をせず、同級生とは進んで本を共用しなければならなかった。第二に、食事のときにも行儀よくしなければならなかった。正しい姿勢で食事をし、兄弟姉妹には謙虚に愛情深く接して世話をし、食事のはじめと終わりにはお祈りをし、食器や椅子を片付けなければならなかった。第三に、通りでも行儀よくしなければならなかった。よきキリスト教徒として外出するときには十字を切り、右側を歩き、ただし目上の人が来たら、挨拶をして道を譲らなければならなかった。また、道草をしたり友達と遊んだりせず、まっすぐ道を行き、他人にも礼儀正しくしなければならなかった。最後に、旅行中にも行儀よくしなければならなかった。降りる人を先にし、年長の人、とくに高齢者や女性には席を譲り、友達にはやさしく、そして両親には従わなければならなかった。従業員に対しても丁寧にし、そして誰に対しても丁重に答えなければならなかった。

つまり、個人の行儀作法や西欧式のマナーが強調されていたのである。

c）祖国の強調

つぎに、この教科書に掲載されている４月から12月までの市民暦・学年暦（巻末資料１参照）

から、どんな行事が強調されているのか、見てみよう。たとえば、子どもの権利条約に触れた人権の日（12月10日）もあれば、ベラスコ軍事政権時代に中央政府から再評価され、独立運動の先駆とされる18世紀末のトゥパック・アマルの反乱（11月４日）やその妻であるミカエラ・バスティーダスの死（５月18日）もあげられている。

ペルーは1821年に約300年間のスペインによる植民地支配を脱して独立する。だから、７月28日の独立記念日をめぐっては国家や愛国心や国旗が強調されるのは自然なことであろう。しかしながら、もっとも目を引くのは、スペインからの独立戦争や砲艦外交、チリとの太平洋戦争、あるいはエクアドルとの領土紛争などに関係する出来事が多く紹介されており、とくに戦争などで殉死した人々が国民的英雄として賛美されているところである。教科書の主人公の名前（Panchito）もじつは、チリとの太平洋戦争のさなかに、1880年６月７日のアリカの戦いで戦死したボログネシ（Francisco Bolognesi）大佐のファースト・ネームの愛称にちなんで命名されたものである。このような祖国の強調は、軍事政権から民政移管されたとはいえ、まだ軍事政権時代の記憶が消えず、近隣諸国との関係も安定せず、センデーロ・ルミノーソやＭＲＴＡのような左翼ゲリラ運動や、政府軍、準軍事組織、あるいは警察の物理的暴力が人々の生活を日常的に脅かしていた1980年代後半のペルーの情況を反映していたように思われる。

ｄ）多様性と優劣

1968年から1980年にかけて、ラテンアメリカ諸国の多くと同じように、ペルーもまた軍事政権下にあった。ただ、1968年から75年までのベラスコ政権は「ペルー革命」を掲げ、上からの国民統合と近代化を推進しようとした左派軍事政権であった。その象徴として取り上げられたのが先述のトゥパック・アマルであり、また、この時期に本格的な農地改革も実行されようとした。農地改革について、*Panchito* では、次のように記されている。

「〔前略〕　ペルーの農民はわが祖国の土地の持主だった。彼らはかつてタワンティンスーユと呼ばれる強大な帝国を作り、農業が高度に発展した。現在では、農地改革により、農業発展へ農民がもっと参加して、増産することが期待されている。農地改革は、土地は土地を耕す者のものであるという原則から来ている。」（121ページ）

ここで「農民（campesino）」という一般的な名称で呼ばれているのが、それまで「インディオ（indio）」の名で、エスニシティが強調されるとともに、侮蔑的に呼ばれてきた山岳部つまりシエラの先住民系のペルー人のことである。ベラスコ政権は差別語としての「インディオ」の使用を止めようとしたのであるが、ただし、教科書ではその説明のあとで「インディエシート」の歌詞が紹介されているから、せっかくの試みも不徹底に終わっているような印象を与えている。

そのような不徹底さは、ペルーが多様な国であることを紹介する地理的分野の記事において、いっそう明白となるだろう。地理的分野では、ペルーがコスタ・シエラ・セルバの３地域から構成されていることがまず指摘され、それから各地域の主要都市が列挙されている。さらに、地域ごとに独特の住居や衣装や舞踊があること、つまりペルーは多様であることが強調されているのであるが、衣装を例にとれば、次のように表現されている。

「ペルーの各地域には独特な衣装がある。コスタでは、男性は夏には薄手のズボンと背広を着、女性は上品な服を使用する。シエラでは男性は羊毛のズボンと、ポンチョと、靴の代わ

りにオホタを履く。女性は、何枚ものポイェーラとマンタつまり「リクリャ」を使用する。シエラではモンテーラやチュリョ（毛糸帽）も使う。セルバでは、町の住民は軽装である。ナティボ集団〔セルバ地域の先住民集団〕は伝統的な衣装を使うが、裸足である。」（95ページ）

事実を指摘しているといえばそれまでだが、靴、オホタ（アンデス風サンダル。ただし、ケチュア語の発音ではウスタとするのが正しい）、裸足という表現の中に３地域の間の序列（コスタが一番進んでおり、セルバが一番後れているとする序列）を感じてしまっても不思議ではない。また、橋の歴史については次のように説明されている。

「〔前略〕 綱の吊橋は狭くて、人やリャマの通行にしか役立たない。スペイン人は石の橋を作った。石橋は大きなアーチの上に建設された。強くて広いので、人や動物や自動車やトラックや列車も通行できる。アーチがひとつの橋も、複数ある橋もある。現在では、いろんな橋が建設されている。材料によって、木の橋や、セメントの橋や、金属製の橋がある。」（102－103ページ）

これも事実を指摘しているといえばそれまでだが、インカ時代、スペイン植民地時代、さらに現代へと時代が新しくなるにつれて橋も進歩してきた、と読めるから、いいかえるならば、ピサロにより創建されたリマを中心とするコスタ的なものの方がシエラやセルバよりも優れているという優越意識がそこから窺うことができる。だからこそセルバの先住民をナティボ部族（tribus natives）とかナティボ集団（grupos nativos）と呼んだり（ただし、後者の呼び方は現在でも行われている）、シエラの先住民をインディエシート（indiecito）と呼んだりする表現が教科書のなかにもまだ残っていたのであろう。たしかに、ペルーが多様な国であることは紹介されているものの、まだコスタ中心主義的な視点から書かれており、そのような点こそまさに、プーノ・プロジェクトのような二言語教育実験からは批判されたところなのであった。

結論するならば、1980年代のクスコ地方で使用されていたスペイン語教科書はいまだに、プーノ・プロジェクトで試みられ始めていた多文化型教育というよりも、セルバ・プロジェクトほど極端ではなかったにせよ、先住民系の児童の目線から見たならば、セルバ・プロジェクトのような同化型教育のほうに近かった、といえる。

２　最近のインターカルチュラル教育

1980年代と2000年代のあいだの1993年に、ペルーではフジモリ政権の手により憲法の改正が行なわれた。この憲法改正はフジモリによる「自己クーデタ」後の国内外からの批判をかわすためのものでもあったが、この現行憲法の第２条では、エスニック的・文化的なアイデンティティに対する権利がすべてのペルー人に認められるとともに、ペルーが「エスニック的、文化的に多元的」な国であることが宣言された。教育との関連では、第48条においてスペイン語がペルー全体の公用語であることが再確認されるとともに、それまで「文化資産」として一段低く規定されていたセルバ地帯の先住民族諸語（アマゾン諸語）もまた、ケチュア語やアイマラ語と同等の地域的な公用語であると宣言された。また第17条では、非識字の撲滅と、そのための二言語・インターカルチュラル教育の奨励、そして文化的・言語的な表出の多様化による国民統合の推進が提唱さ

れた。つまり、スペイン語を母語とする児童もまたインターカルチュラル教育を受けることとなった。1990年代後半から、とりわけ2000年代初頭にかけて、国際的支援を受けて、二言語教育用やインターカルチュラル教育用のカラフルな教科書が作成され、無償で配布されるようになった。以下ではユカイをはじめクスコ地方の都市部で2005年度まで使用されていたスペイン語話者向けの２年生以上の「総合コミュニケーション」用教科書であるミンカ・シリーズを分析していく（図４参照）。たとえば、２年生用の教科書の書誌は以下の通りであった。なお、３年生用以降も同じ著者たちによるものである。Diego Dógar & Javier Boller, *Cuaderno de trabajo: MINKA 2do. Grado de primaria* , Editora Metrocolor, 2001

ａ）多様な児童たち

ミンカ・シリーズでは、1980年代の個人名シリーズの言語教科書のような、首都リマの白人系の裕福な家庭の児童が主人公に設定されているわけではない。

第一に、個人というよりも、手をつないで輪になっている児童集団が主人公である。彼らは、自然環境的にはコスタ・シエラ・セルバから、民族的にはヨーロッパ系・先住民系・黒人系・混血系から選ばれており、多民族・多文化社会としてのペルーを象徴しているのである。

第二に、コスタについても西欧的で都市的な要素にのみ注目するのではなく、家族の紹介では、コスタの漁師の家族が例に引かれている。また、首都リマの家族の紹介では、ヨーロッパ系の裕福な家庭ではなく、父親が工場労働者の家庭の例が引かれている。誕生日には祖父母やおじさんの家族もやってきて、子どもたちはアンデスの民族舞踊に由来するワイノか、最近になって流行したクンビアらしきものを踊っている。衣装はすっかり洋風化しているものの、拡大家族的なところや習慣は庶民的、アンデス的なもののようである。また、別の児童の祖父母から招待されてクラスのみんなは比較的温暖なところにある農場（ただし、イラストからは、かなり多角化されている様子が窺える）に日帰りで遠足に出かけるが、そのことはその児童の両親が地方や農村からリマに移住してきたことを暗示している。

図４　２年生用ミンカ・シリーズノ表紙

シエラの象徴ビクーニャ、セルバのオウム、そしてノートが描かれている。ビクーニャのかわりにコンドルが描かれいるものもある。

ｂ）　ミンカ－連帯労働－

ミンカ・シリーズの教科書では、

1980年代の個人名シリーズでは強調されていた個人の礼儀作法や西欧式のマナーにはほとんど触れられていない。このシリーズの統一テーマとなっているのは、シリーズ名のとおり、「ミンカ」つまり協働あるいは連帯の精神である。ミンカは先スペイン時代から存在した道路や水路を清掃するためなどの共同労働・連帯労働の事を指す[7)]。したがって、この協働の精神こそ、このシリーズの統一テーマとなっている。その具体的な説明は、３年生以降の教科書の冒頭に明記されている。

「［前略］私の名はミンカ。私は、連帯労働のインカの精。私はキープ〔結縄文字〕を作った。階段畑を築いた。金の庭を耕作した。驚異の〔インカ〕道を作った。要塞を築いた。そして今、本になって帰ってきた。新生ペルーを大きくするために。……私は、コンドルの神が幼い鷹たちに空の飛び方を教えるように、君を案内したい。」（３年生用、４－５ページ）

公用語であるスペイン語で言語やコミュニケーションを学習するにしても、先スペイン時代からのアンデス地域の歴史伝統のひとつである協働や連帯の精神を再評価するところから始める、ということであろう。クスコ地方はインカ帝国の中心であり、クスコ市はその首都であった。

ｃ）多様の中の統一

ミンカ・シリーズの教科書は２年生用から始まり、自己・家族・友達・学校・近隣・地域などの単元から構成されている。たとえば、私の友達という単元では「私たちはみんな大切で、みんなそれぞれ違っている」（２年生用、59ページ）ことが、つまり個人も多様であることが、まず確認される。

個人だけではなく、地域もまた多様であることが、次に確認されていく。つまり、ミンカ・シリーズの教科書の中でも、ペルーがコスタ・シエラ・セルバの３地域から構成される多様な国であることが強調されているが、それと同時に共通するところがあり同等であることが指摘されており、そこのところがプーノ・プロジェクトの例よりも新しい、と筆者などは思う。たとえば通学風景を見るならば、シエラでは遠くから徒歩で、セルバでは川をボートで、大都会では交通ラッシュの中を児童は通学してくるが、みんな「勇敢」なところは一緒だ、と強調されている（次ページの図５参照）。

また、*Panchito* では垣間見られたような、コスタがシエラやセルバよりも優越している、という表現も見受けられなくなっている。たとえば、２年生用に採用されている「都会のネズミと田舎のネズミ」（98ページ）という有名なイソップ寓話では、都会のネズミに招待された田舎のネズミが都会の生活の大変さを実感するとともに、田舎の生活のよさを再確認して田舎へ帰っていくところで終わっているのである。

ｄ） 祖国と平和そして「開発」

祖国の強調という側面を見るならば、たしかに７月28日の独立記念日の行事はカリキュラムのなかにしっかり組み込まれているものの、独立戦争や太平洋戦争での殉死者を国民的英雄視するような記事は、*Panchito* と比較すると、かなり少なくなっている[8)]。

なによりもまず、ミンカ・シリーズの教科書の裏表紙には、隣国エクアドルとの長年にわたる領土紛争に終止符を打ったことや、1998年10月26日付の「ブラジリア議定書」の全文そのものが掲載されている。また、スペインからの独立戦争をめぐっても、国歌の歌詞の由来や、最初のペ

図５　ペルーの通学風景（ミンカ。シリーズ２年生用）

シエラ、セルバ、コスタの通学風景が掲載されているが、最後は「男の子も女の子も勇敢だ！」ということばで結ばれている。

ルー国旗が現在の国旗の柄と異なっていたことが取り上げられており、そこではペルーの独立はどちらかといえば歴史の一齣として扱われているにすぎない。いいかえるならば、国民統合がいまだに課題となっていることが分かるが、ただし、望ましい統合の形が数十年前とは変化してきているように教科書からはうかがえるのである。

これまでのように祖国を過度に強調しなければならないような国民統合に代わる教育目標として新たに設定されたのは、もっと生活に密着した問題の解決のようである。ナショナルからローカルへの転換、準戦時体制から「開発（desarrollo）」へ、と言い換えることができるだろう。

たとえば、ミンカ・シリーズの３年生用や４年生用の教科書は、さまざまな領域における「開発」のための教育改善に向けた「子ども版ミンカ・コンクール」の受賞作を紹介していくという体裁をとっている（単元の構成については、巻末資料２参照）。

「学校のある県など」の欄を見れば、都市や農村、コスタやセルバやシエラに学校が分散されていることが分かる。例えば、３年生用では、イカ県とアレキーパ市がコスタに、イキトス市とマドレ・デ・ディオス県がセルバに、そしてフニン県とアンカシュ県がシエラに属する。一方、首都リマからは４年生用のカント・グランデの例が紹介されているが、この地区は首都圏とはいっても、世界遺産に指定されている歴史地区（旧市街）でもなければミラフローレス地区などの新都心でもない。最近周辺農村からの人口の流入が著しい新興地区、いわゆるスラムのひとつなのである。

「名称」の欄からも分かるように、児童らには、各プロジェクトに主体的に、かつ協力して参加することが期待されている。また「課題」の欄から分かるように、環境保護や水問題が取り上げられているほか、大規模なプランテーション開発や大企業の紹介よりもむしろ、もっと小規模な、ペルーの現実に見合ったような、農牧業の多角化やミクロ企業の開発など、身近なテーマが取り上げられている。例えば、世界遺産で有名なチャビン・デ・ワンタル（アンカシュ県）の学

校による３年生用の「ミクロ企業を始めよう」というプロジェクトでは、地元のミクロ企業家を聞き取り調査するところから始まる。修理工や、普通の主婦だった人が祖母から教わった昔風のやり方で作ったマンハール・ブランカという菓子を、家の前で販売しはじめ、やがてミクロ企業に発展したことを取材した。その後、児童らは、「ワスカラン」という名前のクリームソーダを製造販売するミクロ企業体験に挑戦することになり、出資者の募集から広報活動、そして製造販売まで自分たちで実習する。

このように、実践的で、問題解決型のアプローチがさまざまな領域で提起されていくのである。

Ⅳ　おわりにースペイン語教科書の中のケチュア語ー

本稿では、先住民言語が非常に優勢であったプーノ県の農村部で1970年代後半から始まった二言語教育が、やがて二言語教育の枠を超えて二言語・二文化教育、さらには二言語・インターカルチュラル教育へと発展してきたこと、そしてその影響によりインターカルチュラル教育が今日では都市部の児童を対象としてスペイン語のみによって行われる小学校教育でもかなり進展してきたことを、1980年代と最近のスペイン語教科書を比較分析することにより紹介してきた。文化面だけでなく政治や社会・経済の面でも先住民復権運動が高揚し二言語・インターカルチュラル教育が急速に発展してきた隣国のボリビアやエクアドルの例と比較するとペルーの例は目覚しくないように映るかもしれない。しかし、とくにドイツの国際技術協力を得てプーノ・プロジェクトのようなスペイン語・ケチュア語・アイマラ語による多文化型の二言語教育実験が農村教育の一手法として実践されたことにより今日のようなクスコ地方などの都市部においてもインターカルチュラル教育が可能になってきた、と筆者は評価したい。

最後に、スペイン語教科書においてケチュア語などの先住民言語がどのように取り上げられてきたのか、あるいは取り上げられてこなかったのか、見ておこう。

まず1980年代のスペイン語教科書*Panchito*では、先住民言語については単語レベルの紹介にとどまっており、たとえばリクリャ（lliclla）というアンデス風風呂敷やワイノ（huaynos）というアンデスの代表的民族舞踊以外では、クスコをケチュア語読みするとコスコ（Cossco）になり、「世界のへそ」を意味することが掲載されているにすぎない。

これに対して、近年のミンカ・シリーズの教科書では、先述のように、タイトルそのものに協働や連帯労働を意味するミンカ（minka）というケチュア語の単語が採用されており、これは単語レベルだけでなく教育理念そのものがケチュア語やアンデス文化から抽出されていることを明示している。ただし、タイトルを除けば、同シリーズの２年生用の教科書の単元の中では、時間や時計について学習するところでインカ時代にはインティワターナ（intihuatana）と呼ばれる日時計があったことがイラストとともに掲載されている程度である。同シリーズの中でケチュア語がもっとも体系的に紹介されているのは５年生用の教科書のなかの「私の故郷のことば」というところであり、ペルー中部のセルバに位置するセロ・デ・パスコ県オハパンパのアムエッシャ語（アマゾン諸語のひとつ）にはケチュア語と結合した「月の水」（quillazú）という単語があることや、「赤」を意味する単語が、スペイン語（rojo）やケチュア語（puka）だけでなく、外国語で

ある英語やフランス語の単語と一緒に紹介されていることが目を引く。また、インカ帝国つまりタワンティンスーユの標準語だったケチュア語が今もなお生き続けていること、そしてペルーのみんながケチュア語を学べばもっと一体化したペルーを築いていけるだろう、と希望をこめて説明されている。さらに次の32ページでは、「ケチュア語は美しい言語である。」という表題に続いて、フローレス・パロミーノ（Lily Flores Palomino）の「平和」という題の詩が、ケチュア語（しかもケチュア語の正書法どおりに）とスペイン語の両方で掲載されているのも注目に値する。そのほかにも、「盗むなかれ、うそをつくなかれ、怠けるなかれ」("Ama sua, Ama llulla, Ama quella") というアンデス世界の有名な戒めも、スペイン語に訳されることなく、ケチュア語のままで[9] 紹介されている（５年生用、44ページ）。

ちなみに、今日では、クスコ地方の都市部の中等教育機関でも、週当たり２時間ではあるが、外国語教育と並んでケチュア語の時間がカリキュラムのなかに組み込まれるようになっており、ケチュア語を母語とするもの（といっても、小学校では公式にはスペイン語で教育を受けてきたものが大半だろうが）だけでなく、スペイン語を母語とする生徒もまたケチュア語を学習するように、つまり「第二言語としてのケチュア語教育」が、法律で規定されるようになったという。これは、二言語教育という枠組みで考えるならば、レシプロカルな、つまり相互型の二言語教育に分類することができ、新しい傾向である。

ただし、公立学校などでは「尊重すれども遵守せず」というやや植民地的な順法精神が教師の間だけでなく生徒の間でも優勢で、つまり真剣には実施されていないのが実態だとする意見もあるし、現にユカイ地区にある「グランハ」（Granja）というユニークな私立学校の中等部ではケチュア語の授業はまだ設けられていず、むしろ英語教育に重点が置かれつづけているようである。しかしながら、クスコ市内で「プクリャスンチス」（Pukllasunchis）という、「遊ぼう」という意味のケチュア語名の

図６　プクリャスンチスのケチュア語教科書ノ表紙

クスコ市内の生徒を対象とした「第二言語としてのケチュア語」教科書なので服装も洋風化しており、クスコの歴史や文化が多く取り上げられている。

団体が経営する小学校や中等学校のように積極的に二言語教育を実践しているところもあるという（図６参照）。今後の進展に注目していきたい。

注

1） 例えば、青木芳夫「ペルーの二重言語教育の二類型」『奈良史学』第５号（1987年）、「『ペルー・ボリビアの二重言語＝異文化間教育－教科書に見る－』展について」『奈良史学』第18号（2000年）、「ラテンアメリカにおける先住民言語とアイデンティティーペルーを中心に－」『奈良大学紀要』第30号（2002年）など。本稿第Ⅱ章は、とくに「ペルーの二重言語教育の二類型」を参照しており、引用文献等の出典については同論文に掲載されている。

2） ミンカ・シリーズの６年生用の教科書では夏期言語研究所のことが紹介されている。それによれば、創立52周年に当たる1998年当時、約500人の二言語教師がほぼ300校において１万2000人以上の児童に24の先住民言語で教育していたという（６年生用、114ページ）。1990年代のフジモリ時代も、プロテスタント系の夏期言語研究所は中央政府と良好な関係を維持することができたが、移行型の二言語教育というその基本姿勢に変わりはなかった、と考える。

3） プーノ・プロジェクトの中心的指導者の一人だったエンリケ・ロペス（Enrique López）は、プーノ・プロジェクトの終了とともにやがて活動拠点をボリビアのコチャバンバに移し、PROEIB-Andesを拠点として政府・大学・ＮＧＯとの協力により二言語・インターカルチュラル教育の教師や専門家の養成に努力した。その結果、1980年代初めにはペルーよりも後れていたボリビアの二言語教育がペルーに追いつき、追い越す要因のひとつになった。

4） Gabriel Ortiz de Zevallos(ed.), *Educación rural en el Perú* , Lima, 2005, pp.39-44.

5） しかし、都市への移住や出生率の低下により減少してきているとはいえ、2000年においても、ペルーの総人口2660万人のうち741万人が、つまり28%弱の人々が農村部で暮らしており、貧困・栄養不良・貧血・サービス不足・幼児死亡率が深刻な農村における教育の改善はいまなお大きな課題となっている。（*ibid*., pp.68-69）

6） しかし、個人名シリーズの教科書は、ミンカ・シリーズの教科書ほど体系的なものではない。例えば、Panchitoは、他の学年用の教科書が読み物中心であることと比較すると、地理的分野や歴史的分野、公民的分野の内容が多かった。そのことが本稿で考察の対象として取り上げる理由ともなった。しかしながら、考察の対象とするスペイン語教科書の点数をもっと増やす必要があるだろう。

なお、ペルーでは、小学校の教科書は基本的に「言語」と「算数」の２種類であり、したがって副読本を別にすれば、社会や理科についても国語や算数の教科書を利用して学ぶことになる。この点は、ミンカ・シリーズでも同じである。

7） アンデス社会には「アイニ」と呼ばれる相互扶助のシステムがある。これは、等量の労働交換を原則とするものである。例えば、屋根の吹き替えを手伝ってもらったなら、屋根の葺き替えによって返礼しなければならない。1980年代のプーノ・プロジェクトの教科書の場合は、相互扶助についてはアイニのほうが重視されていたという印象がある。

ここで出てくるミンカは、スペイン語でファエナと呼ばれるものに近く、今日でもアンデス地方の農村では、大体週に１回は各家族がそれぞれ一人分の働き手を出して、道路の補修や用水路の清掃といった仕事で協働している。

8） 独立記念日関係を除けば、英雄や偉人の紹介そのものが少なくなっており、例えば６年生用の教科書では、*Panchito* の市民暦・学年暦の登場人物のうち、医師のダニエル・アルシデス・カリオン、ラモン・

カスティーヤ大統領、そしてホセ・ガルベス大佐の３名であり、戦闘で殉死したガルベス大佐も出身地のカハマルカの英雄として紹介されている。

９） 詩と三戒を除けば、カッコでくくったケチュア語の単語は、スペイン語式の発音に則して表記してあった。なお、*Panchito* の場合も、ケチュア語の単語は、スペイン語式の発音に則して表記してある。

Resumen

La educación bilingüe que se inició en Puno rural se desarrolló hacia la educación bilingüe e intercultural. Tal experiencia ha formado la base para la educación intercultural en la zona urbana donde la mayoría de los alumnos hablan castellano cotidianamente. Ahora, por ejemplo en Cusco, la educación de quechua como segunda lengua, o sea la educación bilingüe de tipo reciprocal, se está iniciando aunque sea insuficientemente.

資料１ スペイン語教科書*Panchito*に掲載されている市民暦・学年暦

・４月14日（両アメリカの日）：シモン・ボリーバルによるパナマ会議の開催（1826年）と「米州共和国連合」の創立（1890年）
・４月23日（言語の日）：文豪セルバンテスの死（1616年）
・５月１日（メーデー）
・５月２日（５月２日の戦い）：1866年のカヤオの戦いでペルー軍はスペイン軍を撃退したが、ホセ・ガルベス大佐が殉死する。
・５月第２日曜日（母の日）
・５月11日（マリア・パラード・デ・ベイード銃殺）：独立戦争中の1822年にアヤクーチョ市でスペイン軍により銃殺された愛国の母。
・５月18日（ミカエラ・バスティーダスの死）：ホセ・ガブリエル・コンドルカンキの妻で、1781年に絞首刑に処せられる。
・６月７日（アリカの戦い）：チリ軍との戦争〔太平洋戦争〕中のアリカの戦いで、フランシスコ・ボログネシ大佐らが殉死する。アルフォンソ・ウガルテは、敵軍の手に落ちないようにペルー国旗を海中に投じる。
・６月第３日曜日（父の日）
・６月24日（農民と農地改革の日）
・７月６日（教師の日）
・７月23日（軍用機の日）：ホセ・アベラルド・キニョネス・ゴンサーレス空軍大佐が1941年にエクアドルとの戦闘で戦死する。
・７月28日（サンマルティンと独立宣言）：1821年７月28日の朝、リマの中央広場でサンマルティン将軍がペルー独立を宣言する。
・８月６日（フニンの戦い）：1824年、マリアノ・ネコチェア指揮下の騎兵隊が副王側の騎兵隊を破る。
・８月17日（サンマルティンの死）：1850年、サンマルティンが死去。
・８月28日（タクナ復帰の日）：太平洋戦争でチリに割譲された国境の町タクナが1929年にペルーに返還される。
・８月30日（警察の日）：警察官の守護聖人とされるサンタ・ロサ・デ・リマが1599年に31歳で死去。
・８月31日（解放者の日）：独立戦争に参加し大統領を２期務めたラモン・カスティーヤは1797年に生まれた。彼は、先住民に対する貢納や奴隷制を廃止する。
・９月23日（春分の日）
・９月23日（飛行機の日）：飛行士ホルヘ・チャベスが1910年に墜落死する。
・９月第２日曜日（家族の日）
・10月５日（ペルー医学の日）：ラ・オローヤ熱の解明に功績のあったダニエル・アルシデス・カリオン医師が1885年に死去する。
・10月８日（海軍の日）ワスカル艦のミゲル・グラウ提督がチリとの太平洋戦争中の1879年にアンガモスの戦いで戦死する。
・10月12日（人種の日）：コロンブスのアメリカ「発見」。
・11月４日（トゥパック・アマル革命の日）：ホセ・ガブリエル・コンドルカンキつまりトゥパック・アマル２世が1780年に、正義と自由を求めて反乱に決起する。
・11月第１週（森林の日）

・11月10日（学校図書館の日）
・11月27日（歩兵隊の日）：アンドレス・A・カセレス将軍指揮下の歩兵隊が、タラパカの戦いでチリ軍を破る〔太平洋戦争〕。
・12月９日（軍隊の日）：1824年、ホセ・アントニオ・デ・スクレ将軍指揮下の愛国派がアヤクーチョの戦いで副王軍を破り、ペルーの独立を決定づける〔独立戦争〕。
・12月10日（人権の日）：1948年、国連総会が世界人権宣言を承認する。

資料２ 「子ども版ミンカ・コンクール」の構成

３年生用

単元	学校のある県など	名　　称	課　　題
1	イキトス市ベレン	教室を組織しよう	リサイクル、リユース
2	フニン県ハウハ市	社会見学に行こう	観光開発、環境保護、水問題
3	イカ県チンチャ	学校農園に参加しよう	栄養改善
4	マドレ・デ・ディオス県	祖国独立を祝おう	独立記念日行事
5	アンカシュ県	ミクロ企業を始めよう	企業開発
6	アレキーパ市	学校雑誌を作ろう	コミュニケーション開発

４年生用

単元	学校のある県など	名　　称	課　　題
1	クスコ市	壁新聞を作ろう	コミュニケーション開発
2	フニン県ピチャナキ	父母学級を組織しよう	コミュニティ開発、成人教育
3	トゥンベス県	生命を守ろう	環境汚染、植林
4	ワヌコ市	学校ミンカに参加しよう	母親クラブの幼児食堂の美化
5	リマ県カント・グランデ	学校ミクロ企業を始めよう	企業開発
6	プーノ市	クリスマスを祝おう	芸術開発